

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	工学部の設置より分立まで（第五高等学校前期；第5節）
Author(s)	第五高等学校開校五十年記念會
Citation	五高五十年史：240-252
Issue date	1939-03-03
Type	Book
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/10789">http://hdl.handle.net/2298/10789</a>
Right	第五高等学校（熊本大学）

但名譽會員ニシテ本學部ノ職員ニアラサル者及本學部ノ職員ニシテ寄附ノ金額一個年壹圓ニ充タサル者ハ毎年二回春秋ニ各五拾錢以上ノ寄附ヲ仰クモノトス

第二項 特別會員ヨリハ卒業受験生トナリタルトキ及卒業證書ノ授與ヲ受ケタルトキ各金參圓ヲ二回ニ徴收シ其他ハ別ニ會費ヲ徴收セサルモノトス

但本會成立以前ニ係ル卒業生ハ一回或ハ三回(三箇年ヲ限リ)ニ金六圓ヲ徴收スルモノトス

第三項 通常會員ハ每學期各金貳拾錢宛徴收シ授業料日ニ之ヲ納ムルモノトス

第十四條 第十五條、第十六條、第十七條ハ省略

#### 附 則

此會則ノ修正ヲ必用ト認ムルトキハ會員三十名以上ノ賛成ヲ得評議員會ニ提出スルコトヲ得ヘシ以てその内容を察することが出來ると共に、大學豫科たる本部の龍南會とその趣を異にしてゐることが察せられよう。

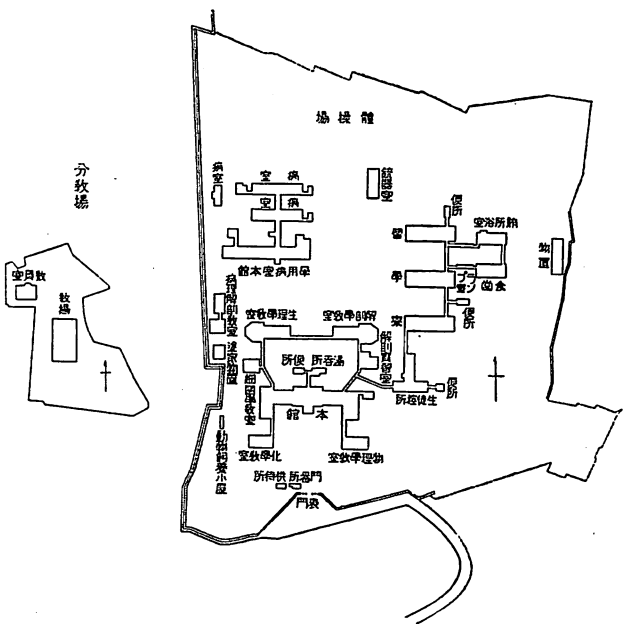
此外、醫學部に於ける協議會や、修學旅行等に就いても、記すべきことは多々あるが、一切之を省略する。

#### 第五節 工學部の設置より分立まで

明治二十七年、第三高等學校には、法・醫・工の三學部のみに留めて、純然たる専門的教育機關と爲し、舊豫科生は第四・第五の二高等學校に分配せられ、第一・第二・第四・第五の四高等學校に於ては、夫々醫學部及び大

工學部の  
設置

工學部主  
事の任命



第五高等學校醫學部略圖

學豫科を置かれたことは既に述べた。然るにその結果、高等中學校設置區域の存在は意義を有しなくなつた爲に、二十九年六月には、來る三十年四月以降、該設置區域に依らざる儀と心得べき旨の訓令が發せられ、二十九年七月には、舊豫科を全廢せらるゝに至り、我が第五高等學校には、三十年四月十七日、文部省令第六號を以て、明治二十七年の勅令第七十五號高等學校令第四條に依り、修業年限四箇年の工學部が設置せられ、同年七月、本校教授櫻井房記氏が工學部主事を命ぜられ、茲に本部と二學部とより成る全國特有の高等學校となつたのである。

かくて同年、本校建物の東側に工學部生徒控所を、三十一年、理化學實驗室二棟の外教室實驗工場を、三十三年、實驗工場附屬家一棟を新築して、漸次内容の充實を計つたのである。而して三十二年十一月を以て改正せら



計	體操	實驗及製圖	家屋構造	衛生工學
三九	三	一〇		
三九	三	一四		
三九	三	一五		二
三九	三	二二		二

備考 實驗及製圖ノ時間ハ物理化學等ノ實驗實地測量圖式力學ノ製圖及工事ノ計畫等ニ充ツ故ニ每週時間總計凡ソ三十九  
時ト爲ル

第四年級ニ於テハ第一及第二學期ノミ講義ヲ設ケ第三學期ハ卒業計畫及之ガタメニ要スル實地研究ニ充ツ

機械工程學  
課程表

機械工學科課程

地 質 及 礦 物	化 學	物 理	數 學	英 語	國 語	漢 文
			代數幾何三角術等 補遺 解析幾何			第一 年
				四	四	六
			微分積分幾何			第二 年
				二	二	六
			微分積分補遺式			第三 年
				二		
						第四 年

計	體 驗 及 製 操	實 機 械 設 計 圖	特 別 講 義	工 場 用 具 論	機 械 工 學	製 造 冶 金 學	發 電 機 及 電 動 機	工 藝 經 濟	材 料 及 構 造 強 弱 論	發 動 學	機 械 學	力 學 及 圖 式 力 學	測 量 學	畫 學
三 九	三	九		一										三
												分 運 子 動 力 學		
三 九	三	一 四												
												應 用 力 學 圖 式		
三 九	三	一 六				四	一	二	三	五		三		
三 九	三	三 三	一					二						

備考  
機械設計實驗及製圖ノ時間ハ物理化學ノ實驗實地測量、圖式力學ノ製圖機械及工事ノ計畫等ニ充ツ故ニ每週時間總計凡ソ三十九時ト爲ル第四年級ニ於テハ第一及第二學期ノミ講義ヲ設ケ第三學期ハ卒業計畫及之カ爲メニ要スル實地研究ニ充ツ

工學部獨立に關する意見書

然るに、醫學部が、三十年四月、専門學校として獨立したばかりでなく、全國各高等學校を通じて、大學豫科のみを設置せられ、専門學部を有するのは、本校に限られることとなつたので、本校當局としては、工學部の獨立を切望し、同年、當時の狀況を示して、校長の名を以て、文部大臣宛、左の如き意見書を上申したのであつた。

當校工學部ハ明治二十七年勅令第七十五號高等學校令ニヨリ明治三十年七月設置セラレタルモノナリ而シテ各高等學校醫學部ハ已ニ本年四月醫學専門學校ノ新名稱ノ下ニ獨立セシメラレ今や高等學校ノ専門學部トシテハ當校ノ工學部アルノミニシテ而モ大學豫科ハ高等學校ノ本體ニシテ工學部ハ其附屬ノ學校タルカ如キ觀アルニ至ル故ニ學制上工學部ニ關シテモ早晚何等カノ御措置アラセラルヘキコト、存候ニ付當校工學部ノ將來ニ對シ謹ンテ別紙ニ卑見ヲ具申候也

## 工學部現在ノ狀況

## 一 生徒ノ定員、學級ノ數

工學部生徒ノ定員ハ二百四十名トス即チ

土木工學科	第四、三、二、一年級	各組	三〇名
機械工學科	第四、三、二、一年級	各組	三〇名

合計

二四〇名

之ニ對シテ生徒ノ現在員數ハ左ノ如シ

	第四年級	三年	二年	一年	計
土木	一一	一七	二〇	四〇	八八
機械	八	一二	二三	三九	八二
計	一九	二九	四三	七九	一七〇

	入學者	退學者	在學者	卒業者
三十年	五八	三五	一四	九
卅一年	四〇	一七	二三	—
卅二年	三九	一八	二一	—
卅三年	六六	二二	四五	—
卅四年	六七	—	六七	—
計	二七〇	九一	一七〇	九

三十年より三十四年に至る志願者合格者

右に就いて少しく補足して置きたいことは、本校に遺つてゐる入學志願者番號帳に據れば、三十年、土木工學科には、尋常中學卒業業者三十七名は無試験、全科を受験すべきもの二名の中一名落第、機械工學科には、同上の無試験三十三名、同上の受験者二名の中一名落第、凡て七十二名新入し、三十一年には、土木科二十四名、機械科十七名、凡て四十一名の無試験入學、三十二年には、土木科十九名、機械二十二名、凡て四十一名の無試験入學、三十三年には、土木科五十二名の志願者中、無試験入學者十九名、追應募受験入學者十二名、機械科五十名

## 第一回卒業者數

の志願者中、無試験入學者二十一、追應募受験入學者十三名、凡て六十五名、三十四年には、土木科は無試験入學者二十三名、九月再募受験者十八名中合格者十一名、機械科は無試験入學者二十三名、九月再募受験者十七名中及第十一、凡て六十八名となつてゐるのである。而して表中如何に退學者の多くして、三十年五十八名の入學者中、第一回の卒業生が、僅々九名に過ぎなかつたことは、驚くべきことであらう。

而して右の上申は、必ずしも文部當局の容るゝ所とならず、三十四年五月には、勅令を以て、東京工業學校を東京高等工業學校、大阪工業學校を大阪高等工業學校と改稱し、三十五年には、京都高等工藝學校その他の實業專門學校が増設され、三十六年三月二十六日には、勅令を以て、專門學校令が公布されたが、本校の工學部は、三十五年、學科課程の一部に變更を加へ、土木工學科に於ては、第一學年の國語漢文四時間を廢して、英語に二時間、物理に一時間、化學に二時間を増し、材料及構造強弱論は、建築材料及び材料強弱論の二科に分れ、橋梁及施工法も同じく二科目となり、新に第二學年に隧道を、第四學年に土木行政を設け、機械工學科に於ては、國語漢文は土木科と同じく之を廢し、英語に二時間を増し、第三學年の發動學並に機械工學を廢して、新に蒸汽及蒸汽機關を設けて、之を二・三兩學年に課し、材料及構造強弱論は、之を二科目となし、新に水車及水力機を設けて、之を二・三兩學年に課することとなつた。

## 獨立と中原校長の任命、本校の轉勤

かくて明治三十九年三月二十九日、漸く宿望が達せられて、熊本高等工業學校と改稱せられ、元本校教授中原淳藏氏が初代の校長に任命せられ、神谷豐太郎・川口虎雄・三浦鍋太郎・久米恆松・小溝茂橘・下山秀久・遠藤金市・藤原喜太郎・小宅千次郎・岩崎重三・鈴木都賀三郎・早崎勸・奥村省三の諸教授、助教授兼書記余田司

## 移轉通知書

馬人・助教授大平柏三郎・書記右田彌太郎・同蒲地玄道の諸氏は、勅令第四十六號を以て、同年四月一日熊本高等工業學校職員に任せられ、同日囑託教員宇野親時、同村瀨玄、雇四人も本校より轉勤を命ぜられた。而して中原校長より松浦本校長に宛てた移轉通知なるものが遺つてゐるので、念の爲に記して置く。

## 移轉通知書

本校新築校舍大部竣成シタルニ付本月一日實驗工場ヲ除クノ外凡テノ事務ヲ熊本縣飽託那黒髮村大字留毛ニ移轉致候此段及御通知候也

明治四十一年七月四日

熊本高等工業學校校長工學博士 中原 淳 藏

## 第五高等學校校長松浦寅三郎殿

此に由つて觀るも、工學部は獨立後一年にして、本校の南大津街道を隔てたる地域に移つたことが知られるのである。

## 工友會

## 工學部工友會の成立

本校本部の龍南會並に醫學部の研瑤會とは、稍その趣を異にするものではあるが、工友會に就いても一言して置きたいと思ふ。申すまでもなく工學部は、本校内の所謂白草原に位置し、寄宿舎習學寮の生活は固より、龍南會員たることは、後章にも明かであるが、工學部のみの親睦と修養の爲に生れたものが、即ち工友會なるものであつた。明治三十二年五月三十一日發行の龍南會雜誌（第七拾貳號）に依れば、工學部生徒總代九名は、中川校

長宛左の如く願出てゐる。

御 願

今般本工學部一般學生ノ意向ニ基キ工友會ト稱スル工學部學生總合ノ一團體ヲ組織致スコトニ相成候條別紙會則書相添へ總代連署御認可ヲ恭請候也

明治三十二年六月十四日

第五高等學校工學部生徒總代

中 小 安 松 西 宇 淺 眞  
限 伊 旗 島 田 下 門 津 川 鍋  
勢 種 禎 三 忠 範 五  
吉 善 藏 郎 郎 滿 雅 男

第五高等學校長 中 川 元 殿

工學部工友會會則

工友會會則

第一條 本會ハ第五高等學校工學部及ヒ之ト關係アルモノヲ以テ組織シ一致親密ヲ圖リ互ニ智德ヲ研磨スルヲ以テ目的トス

第二條 本會ヲ工友會ト稱シ第五高等學校工學部内ニ置ク

第三條 本會々員ヲ分チテ名譽會員、特別會員、通常會員ノ三トス

一、名譽會員ハ本部教員中ニ乞フモノトス

一、特別會員ハ本部卒業生ニシテ終身會員タルモノトス

一、本部在學中ノ學生ハ總テ通常會員タルベシ

第四條 本會ニハ通常會員中ヨリ左ノ役員ヲ置ク

一、幹事一名 一、會計一名 委員各二名宛

但シ幹事ハ全學生ノ選舉ニ依リ會計ハ委員ノ互選ニヨリテ定ム

第五條 役員ノ任期ハ一年間トシ每學年ノ始メニ於テ之ヲ改選ス、但シ引續キ當選者ハ之ヲ辭スルコトヲ得ルモノトス

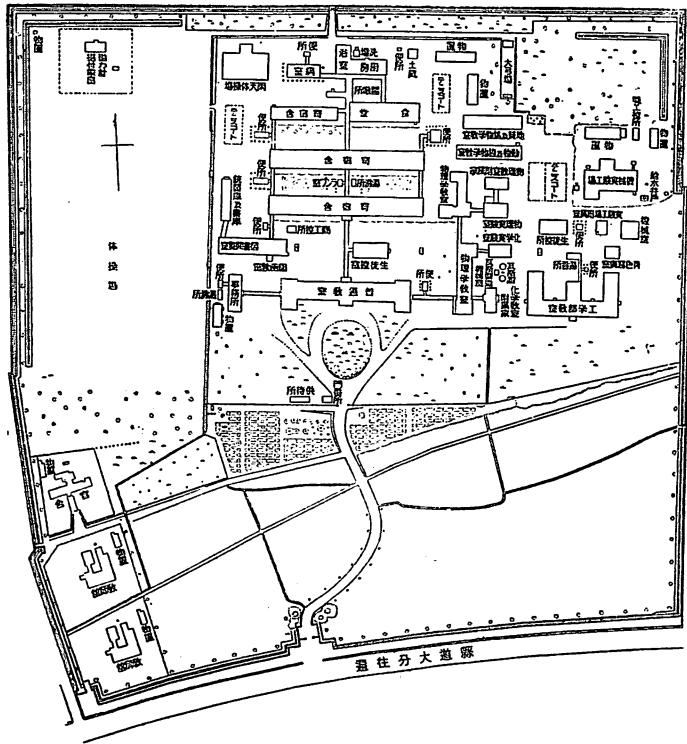
第六條 幹事ハ本會ノ事務ヲ總理シ會計ハ出納ニ關スル事務ヲ取扱ヒ學年最終ノ談話會ニ於テ精算報告ヲナスモノトス委員ハ凡テノ事務ヲ補佐シ併セテ其組ヲ代表スルモノトシ本會全體ニ關スル事件ハ役員會ノ議決ニ由ル

第七條 本會一切ノ費用ハ會員ノ定時出金及ビ寄附金ヲ以テ之ニ充ツ、但シ當分會費ハ一學期間金拾錢トシ每學期ノ初ニ於テ納ムルモノトス

第八條 本會ハ例會トシテ每學期一回ノ談話會ヲ開ク但シ時機ニヨリ臨時開會スルコトアルベシ

第九條 會員ニシテ不都合ノ行爲アリト認ムルモノハ之ヲ忠告シ若シ改悛ノ兆ナキハ役員會ノ決議ヲ以テ之レヲ除名スルコトアルベシ

第十條 本會則ハ會員十名以上ノ提出ニヨリテ役員三分ノ二以上ノ議決ヲ經テ變更追加スルコトヲ得ベシ



(明治三十三年) 第五高等學校略圖

あらう。而して同會其後の動向に就いては、談話會、講演會、端艇競漕等種々の行事もあつたが、それ等は一切熊本高等工業學校沿革史に譲ることとする。

明治參拾二年二月  
右願書には六月十四日とあるのに、會則には二月とあり、而も五月號の雜誌には既に掲載されてゐるのは如何なる理由に依るかを詳にしないが、中川校長より發せられた工友會設置指令は、六月十四日付となつてゐるので、工友會の成立はこの日と定むべきで

日露戦争  
の原因

### 第六節 日露戦争當時より明治末年までの龍南

廣東に派遣された清朝の欽差大臣林則徐が、英人の手にある阿片を焼却せしめた事を直接の原因とする阿片戦争の南京條約（一八四四年）や、英國汽船アロー號事件の天津條約（一八五八年）等の結果、英米佛露の極東進出は餘りに顯著な事實であるが、本節に必要な露國については、夙望達成の過程として、鴨綠江森林會社の西北部朝鮮に勢力を扶植せんとしたのは、我が國の權益を侵略するものであり、明治三十六年八月十二日、我が國より提議せる協商條件は露國の容るゝ所とならず、遂に翌三十七年二月六日の國交斷絶となり、二月八日には我が艦隊の旅順口襲撃となり、二月十日には宣戰布告が發せられたのは周知のことである。今次の支那事變が未曾有の事態であることは云ふまでもないが、國力の充實せる點に於ては較ぶべくもなく、従つて當時に於ける國民の覺悟は、恐らく想像以上であつたことを斷言するに憚らないのである。時の外務大臣小村壽太郎氏は、久保田文部大臣宛左の如く通告を發してゐる。

#### 機密送第一號

帝國政府ハ日露協商ニ關スル商議ヲ斷絶シ帝國ノ自衛上並ニ權利及利益ノ防衛上必要ト思考スル獨立ノ行動ヲ採ルコト並ニ露國政府ト外交關係ヲ絶チ我公使館ヲ引揚クルコトニ決シタルヲ以テ本月五日在露帝國公使ニ對シ右ノ趣露國政府ニ通牒スベキ旨電訓ニ及ヒ候處同公使ハ翌六日ヲ以テ右訓令ヲ執行シ來ル十日頃同地撤退ノコトニ相成候仍テ今八日本邦駐劄露國公使ニ知照シ兩國ノ外交關係ハ既ニ斷絶シタルニ付本邦ニ於ケル同公使

國交斷絶  
宣戰布告

小村外務  
大臣より  
久保田文  
部大臣へ  
宛てたる  
通告